二〇一八年　全戦没者追弔法会

「兵戈無用　―正義と正義の対立を超えて―」

一九八七年、戦没者追弔会として勤められていた法要に「全」と「法」の字を付して、その名称を「全戦没者追弔法会」としてから三十年を越えました。戦争とは、戦争に対する態度、思想信条を問わず、すべての老若男女を、有無を言わさず大きな渦に巻き込み、殺し殺される中で、かけがえのない無数のいのちは言うまでもなく、一人ひとりが大切にしてきたすべての事柄を否応なしに根底から奪うものです。戦没者とは日本の軍人、軍属の人ばかりではありません。「全」の一字には、この法会を通して、戦争でいのち奪われた一人ひとりと向き合おうという願いが込められています。

戦後七十三年が過ぎ、取り返しのつかない惨禍をもたらしたあの戦争を、身をもって経験された方々の声を聞く機会は、わずかしか残されていません。悲しみの伝承は困難となり、戦争の歴史は風化の一途を辿るばかりです。明治期以降、私たちの宗門は宗祖親鸞聖人の仰せになきことを仰せとして語り、戦争に協力してきたという罪責を抱えています。さらに、国益のための侵略を「聖戦」と呼び、中国や朝鮮半島の人々をはじめ、アジア太平洋地域のみならず、世界中に苦痛と悲しみを強いました。現代を生きる私たちは、戦争の苦難を生きた方々の声なき声に耳を澄ますことができているでしょうか。

翻って、国内では、国民の自由を縛る共謀罪の成立や、憲法の精神を骨抜きにしようとする改正に向けた動きなどが見られます。そこには、国益を護るためには個が犠牲とされても厭わないような風潮があります。戦争がもたらした悲惨にたじろぎ、平和を求めてきた戦後の歩みが、再び戦争前夜の歩みに置き換わっていくような流れが形作られているのではないでしょうか。さらに、国際情勢に目を向ければ、国家や民族、宗教の異なりから、それぞれの正当性を主張することが繰り返されています。私たち人間は、なぜ自らの正義をふりかざし、互いを貶め合い、相対立する関係の中で、憎しみや偏見を増幅させてしまうのでしょうか。

このような時代の激流の中にあるからこそ、真実の教え（「法」）を聞くことによって、惑わされることなく立ち止まることが、私たちに求められているのではないでしょうか。私たち自身が、あらためて「全戦没者」と向き合っていくことが、「法」から促されていることを感じます。「兵戈無用（軍隊も武器もいらない）」（『仏説無量寿経』）なる世界、その願いこそが、「全戦没者」一人ひとりの奥底に抱かれた願いに他なりません。このたびの法会が、正義と正義の対立を超えて、戦争という悲しみの歴史を背負い、平和への願いを共に生きる機縁となることを心より願うものです。